ものと考えられた。Dental MPR の件数が増加しているのは，これまでの CT では診断が難しかった症例に対しての Dental　MPR の適用例が増加しているためと考えられた。
結論：本学歯学部附属病院における CT の件数は年々増加しており，口腔外科領域だけではなくその他の歯科領域においても，そのニーズが高まっていると考えられた。

演題6．顎関節外科外来の現状

○大平　明範，佐藤　理恵，根反不二生，
関山　三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座
顎関節外科外来

目的：顎関節外科外来における患者の動向や紹介状況および治療内容を把握することを目的とする。
対象・方法：平成15年3月12日から6月30日に当外来を受診した顎関節疾患患者に対して行ったアンケートや当外来で用いているプロトコールや当科のカルテを基に調査した。
結果：患者の性別は男性21例，女性55例で，平均年齢は男性34.5歳，女性36.4歳であった。患者住所は盛岡市34例が最も多かった。交通手段は，自家用車が39例と最も多く，来院までに要した時間は11～30分と61～120分が多かった。紹介先の診断は顎関節症と顎関節症の疑いが多く，当外来への紹介率は63.2%であった。紹介先での治療はスプリントが最も多かった。主訴は顎の痛みが44例（57.9%）と最も多かった。当外来の診断は顎関節症56例が最も多く，顎関節症の症型分類では，Ⅲb型の20例（35.7%）が最も多かった。当外来での治療法は，薬物療法が15名と最も多かった。また，顎関節鏡を用いた治療（外科療法）は16例（28.6%）であった。
考察：当外来には他施設から紹介される患者の割合が多かった。また，紹介先での治療（保存療法）に抵抗を示す，難治性の症例が紹介されることが比較的多かった。当外来では，新たに局所麻酔下（外来）で行える細径顎関節鏡システムを購入したことによって，従来よりも外科療法（顎関節鏡視下での治療）を行う割合が増えた。また，患者は沿岸部や他県から当外来を受診する例も比較的多く，1時間以上かけて当外来を受診する患者の割合が多かった。
結論：本調査によって顎関節外科外来における患者の動向や紹介状況および治療内容が把握できた。

演題7．舌痛症患者の血液検査所見に関する検討

○瀬川　清，八木　正篤，青村　知幸，
太田　敏博，中島　崇樹，菅野　真人，
松尾　徹也，水城　春美

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

目的：舌痛症の原因はまだ明確でない。一般に舌痛を生じる原因として全身的には貧血，糖尿病，低栄養状態，ビタミン欠乏などがいわれている。そこで今回，舌痛症患者における血液検査のスクリーニングをどのように進めてゆくべきかの指針を得る目的で，舌痛症と診断した患者のうち血液検査施行例に関して検討した。
対象：1999年4月～2003年3月までの舌痛症患者131例のうち血液検査を施行した77例（男性5例：平均年齢57.8歳，女性72例：平均年齢60.3歳）である。既往歴・合併疾患では，婦人科疾患（19例／31例）が最も多く，次に高血圧・心疾患（15例／23例），胃腸疾患（15例／21例），アレルギー性疾患（12例／19例），甲状腺疾患（8例／16例）などであった。
結果：血液一般検査では，貧血が7例認められ，血液化学検査では，低栄養状態の疑い例が59例中10例，肝機能検査値異常例が59例中19例，腎機能検査値異常例が57例中11例であった。また，ビタミン検査では Vitamin B2 低値が29例中6例，Vitamin B6 低値は27例中1例で，逆に B6 が高値を示したのは14例で，ビタミン剤や健康食品などの長期連用者であった。
考察および結論：今回のデータから舌痛症の原因を特定できた症例はなかったが，血液検査データに異常が認められる症例も多く，特にビタミンの血中濃度で Vitamin B2 低値あるいは Vitamin B6 高値を呈する症例が多いことから，今後症例を増やして，これら血液検査データと舌痛症との関連についてさらに検討する予定である。